

三日目(9月27日)の朝が来た。5時に起床して荷物をまとめてチェックアウトし乗船場に歩いて向かう。さほど遠くないので6時前には港に着いた。

小さな島なのである程度は歩いて用が足りる。友人がまとめて乗船券を買ってくれるので、候船大庁(乗船待合室)でのんびりする。6時半ころ船に乗り込んだ。例の潜水艦に似たフェリーである。船体に「海華」と書かれている。昔見た「海底二万哩」という映画を思い出した。6時35分出航、10分足らずで対岸の「朱家尖」に着いた。あっという間の普陀山旅行であった。とても名残惜しくなった。

二泊三日の短い旅ではあったが、この間一人の日本人にも会わなかった。中国には観光地は星の数ほどあるが、是非この小さな島を見ることをお勧めしたい。友人が一度は行って見る価値がある、と言っていたが私もそのように思った。まだまだ見る所はたくさんあるようだが、初めて行かれる方はこれまで紹介したところをまず見られるといいと思う。

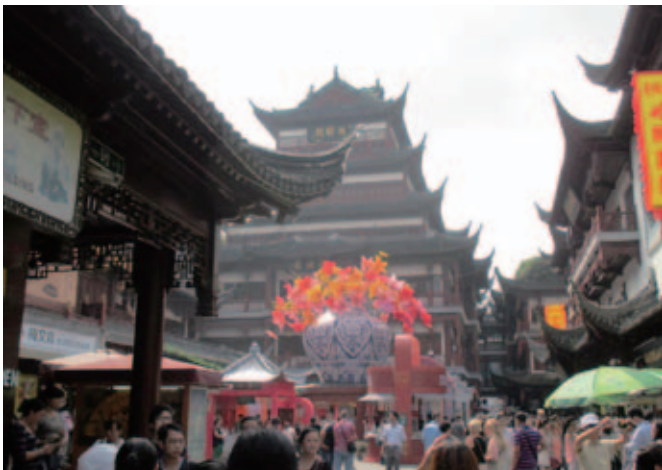
ところで「普陀山」という名は、観音菩薩がお住まいになるという補陀落(あるいは補陀落山)に擬せられ、名前の由来もここから来たものである。補陀落は、サンスクリット語(古代から中世



普陀山からのフェリーが着岸した小家尖港風景

にかけてインド、東南アジアで用いられていた言語)の「ポタラカ」の音訳である。伝説では、インドの遙か南の海上にある八角形をした山(島)という。西遊記で有名な玄奘三蔵の「大唐西域記」にはこの山がインドの南に実在すると書かれてあるそうだ。チベットも観音信仰の地として知られているが、西藏自治区の省都ラサにあるポタラ宮(布達拉宮)の名前の由来も「ポタラカ」から来ている。観音信仰は日本にも広く伝わり、いくつもの寺院が補陀落山を山号にしている。和歌山県的那智勝浦町には、補陀落山寺という名称の寺院まである。

さて上海行きのバスは、港から少し離れたバスセンターから出ると言うのでタクシーに乗った。着くとかなり大きな建物である。壁面に「普陀旅游集散中心」と書かれている。なぜこのような車もさほど通らないところにバカでかい建物が必要なのであろう。「集散」という文字が入っているが日本の感覚では違和感がある。例によって友人がまとめて切符を購入してくれるので大助かりだ。時間が来たので改札を通り、バスがたくさん駐車している広場に出た。我々の乗るバスは2階建ての大きなバスだ。定員は39名とある。全車指定席で座席はゆったりとしており、その上制服を着た若い可愛らしいガイドまでいる。



上海・豫園商店街の雑踏



サービスが素晴らしかった2階建て高速バス

なぜ来た時のバスとこうまで違うのか不思議で狐につままれたみたいである。友人に訊ねたが今一つ分からない。でも逆でなくてよかったと思った。我々は、バスの中ほどの階段を昇って2階席に座った。階段の壁を見ると、「文明、今天你做到了吗?」(あなたは今日礼儀正しいことができましたか?)というステッカーが貼ってあった。マナー向上に取り組んでいるのか、とほほえましくなった。

バスは7時30分に発車した。朝食を食べていないので早速昨夜買い込んだバナナやミカン、リンゴを食べ始めた。すると間もなく件のガイドさんがプラスチック容器に果物を入れたものとビスケットなどが入った袋を配り始めた。中にはおしぼりまで入っている。その後飲み物を出すと言うのでコーヒーを頼んだ。ジャスミン茶もある。ガイドさんは感じがよくサービスは一級品と言っていい。138元(当時のレートで約2300円)のチケットであるが安いものだ。これまで中国国内でいくつもの交通機関を利用したが、こんなに気持ちよく乗ったことがない。終わりよければ全てよし、というがこれも観音菩薩のご利益かもしれない。

バスは、12時頃上海市内を流れる黄浦江に架かる「南浦大橋」のインターチェンジのそばにあるバスの終点に無事到着した。昼食は友人の知っている四川料理店「麻辣香鍋」で摂る。食後は、上



上海・浦東地区の代表的な高層ビル群(真中の細長いビルが「上海タワー」)

海旅行の定番の豫園に行ってお土産を買うことにした。2010年の上海万博の時に来たが、その時以来で懐かしい。今日も快晴で、9月末だというのにととても暑い。買い物はそこそこにしてアイスクリームを買って小休止。この後、黄浦江をくぐって対岸の浦東新区にある有名なテレビ塔「東方明珠」に向かった。その後9月24日に泊まったホテルに帰り、預けておいた荷物を受け取った。もう明日(9月28日)は、日本に向かうのである。

4回にわたって「上海市と普陀山」を紹介してきたが、最後に上海の最新の状況について触れて終わりたい。それは浦東新区にある中国一のビルで、ドバイにある「ブルジュ・ハリファ」(高さ828m、160階建)に次ぐと思われる「上海タワー」(上海中心)と呼ばれる建物についてである。

黄浦江を挟んだ両岸は、極めて対照的な光景で最も上海で有名なところである。東側が高層ビル群で現代中国を代表するエリアであり、西側は外灘(バンド)と呼ばれるエリアで150年から160年前の租界時代に建てられた低層ビル群で

あるのはご承知の通りである。上海タワーは東側の高層ビル群の中によっきりと起ち上がっている。これまでの超高層ビルと言えば、上海環球金融中心(高さ429m、104階建て)と金茂大廈(高さ420m、88階建て)であった。

両ビルは極めてユニークな設計で知られている。前者は2013年現在、世界第5位(中国では第1位)の高さを誇り97階~99階部分に台形の穴が開いていて、ちょうど栓抜きに似ている。後者はビル全体が仏塔の屋根のようにリズムカルに、階数が上がる毎に細くなる尖塔状の建物でとても印象的である。西安にある大雁塔や小雁塔をイメージしたように見える。

さて上海タワーである。この超高層ビルは二つのビルより頭一つ、二つ抜きんでている。ガラス・カーテンウォールで外側は覆われていて、螺旋状にねじれながら高くなっている。これまた印象的な外観である。高さは何と632mで128階建てなので今のところ世界第2位であろう。一体人間はどこまで高く造りたいのであろうか。私にはつまらない見栄に思われる。地震がない地域ということなのであるが、この世で「絶対」という言葉ほどあてにならない言葉はない。「タワーリング・インフェルノ」という映画のように火災になったらどうするのであろう。飛行機が激突したらどうなるのだろう。心配の種は尽きない。これら超高層ビルには決して登りたくない。

この三つのビルはお互い奇妙な調和を保ち、

高さ比べをしている。ちなみに日本での超高層ビルで比べると上記の3ビルの大きさがわかる。日本で2番目に高い「横浜ランドマークタワー」は1993年に完成したが、高さは296m、70階建てである。地震国であるし、これ以上の高さのビルはいらない。東京スカイツリーで十分である。

私が昨年9月に行ったときには、「上海タワー」は最上階あたりを残し、完成に近づいているところであった。そして12月末に完成し、上海の名所がひとつ加わることになった。これからも上海は訪れるたびに新しい顔を見せてくれるであろう。

9月28日の朝を迎えた。今日も天気がいい。8時頃チェックアウトしホテルの玄関を出た。するといい香りがする。見ると、出たところに二本の大きな金木犀の木があり、金色の花を満開にしている。別れを惜んでいるようだ。あっという間の5日間であった。

(終わり)

◆「中国・城市めぐり」を終えるにあたって

私の「中国・城市めぐり」は7月号で43回目を数えます。このシリーズは主として私が大連に赴任していた時、連休を利用して旅行した都市について書いたものです。書くに当たってはガイドブックに掲載されていない情報やあるいは視点を変えたりして書いてきたつもりです。今回で一巡しましたので終わりにしたいと思います。長くお付き合いして頂きありがとうございました。